

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を
診察するわけ

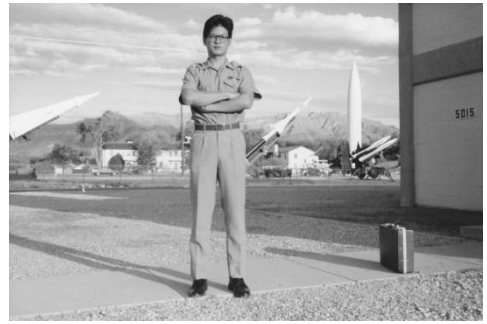
第四部

群馬からエルパソ そして防衛医大へ

自衛隊医官としての最初の勤務は、埼玉と群馬の県境で関越道上里SAそばの陸上自衛隊新町駐屯地でした。後方支援連隊の小隊長(26歳2等陸尉)として、50歳の定年間際の陸曹を部下に持つという非常に難しい役職を頂きました。当地では同級生の藤岡君(肝臓内科)、岡田君(消化器外科)と3名の医官勤務であり、日常は平穏な日々でした。時に富士山での演習、冬山でのスキー訓練などがありました。概ね楽しく自衛官生活を送れました。

私生活では結婚後しばらくの間、義父の世話になり、東日暮里にある加藤家隣接の賃貸アパートから京浜東北線あるいは関越自動車道で群馬まで通勤しました。時間を無駄にしないように群馬での仕事の際は医務室に寝泊まりし、勤務終了後は防衛医大に戻り研究しました。内分泌研究グループは赤津先生(現並木病院院長：当時昭和大学に国内留学中)、角先生(現こぶしクリニック院長：当時海上自衛隊呉基地勤務、その後広島大学国内留学)もおられました。両名とも防衛医大には在籍されておらず第三内科内分泌研究室はスタッフが少ないため放置状態に近く、何でも自由にやらせて頂ける雰囲気でした。当初は2年先輩の安友先生の手伝いをしながら、高カルシウム血症で亡くなった方の肝転移巣から血清カルシウムを上昇させるペプチドの同定を目指しました。また後には、派生した研究から副甲状腺ホルモンの活性を変化させる生体因子の検討などを海外ジャーナルに投稿する機会を頂きました。

妻の雅代は妊娠とともに英語教諭を勤めていた千葉市川の国府台女子学院を退職しました。将来の防衛医大勤務を考慮し小手指「みどりのマンション」を中古で購入し、おなかに赤子を抱えた雅代と2人でクッションフロアの張り替えなど、自分たちで中古マンションをリフォームしました。当時はバブル後半で今住まいを持たないと将来も持たないかもしれないという危惧を抱いていましたが、デフレの今はマンション価格も非常に下がっております。その後、長男雄樹は自宅から近い西埼玉中央病院(当時国立西埼玉)で生まれました(ちなみに孫の総司も1年少し前に新病棟



で生まれました)。

研究を進めていた最中に、12衛生隊から陸上自衛隊の防空システム(当時はホーク)の訓練をテキサス・エルパソで実施するに当たり、隊員の健康管理のために、本部要員として参画するよう求められました。藤岡君・岡田君はそれぞれの家庭および研究・臨床環境から固辞し、私がエルパソに赴くこととなりました。初めてのビジネス座席でのフライト、将校としての扱い、米軍を介した海外同盟国の人々とのふれあいなど貴重な体験をさせて頂きました。エルパソは国境を挟んでメキシコ側はワレスという街です。砂埃が舞い、衛生環境が全く異なる土地でバーに立ち寄り、ビールを飲んでみんなと語らう貴重な機会を頂きました。

3ヶ月の米国赴任中は妻雅代と長男雄樹は四国宇和島の実家で生活し、妻にとっては良い思い出となったようです(何事も前向きな気性です)。エルパソでは実地で英会話が習得でき、ゴルフ・観劇・観光なども謳歌しました。帰国後は同級生二人と所属長の計らいで研究に没頭できる時間を頂き、様々な体験をさせて頂いた時期であったと思います。帰国した後、市ヶ谷駐屯地で医官不足となり支援に赴いていた期間中に元号が昭和から平成に変わりました。

その後防衛医大に専門研修医として戻り、内分泌・糖尿病内科医としての診療・研究に打ち込みいくつかの論文を作成しました(論文業績はホームページをご参照下さい)。当時第三内科にいて切磋琢磨した同窓生は皆優秀で、水上君(血液内科)は自治医大の教授、峰下君(呼吸器内科)は聖マリアンナ医科大学教授、大石君(呼吸器内科)は東京医大(霞ヶ浦)教授、槇島君(血液学)は日本医大教授になりましたが、当時は皆同じ立場で研究・臨床などを所沢の地で楽しみました。

第五部では防衛医大専門研修医の終了とともに勤務した朝霞駐屯地の思い出とオーストラリア・メルボルンへの留学について回想したいと思います。